

泳ぐ熱 —— 天兎牛大に

移動する

分割できない一人分が移動する

十二年前

私は「指半月」という仕事をこころ始めた

いま

私は

指先を

別の場所の同じ水に染める

声は変わり

性も匂いも横顔も変ったが

言葉の髪は千年の森

早瀬の底で流れをからめ

手を添えることも

息を吹きかけることも

なく

ただ

風を裂く者よ

眼を打ち返す者よ

芝山幹郎

イーレイス・ベロデー

夕立を浴び

砂埃と叩き合い

移動しつつある者よ

変化しつつある者よ

君が私に微笑のチャイを差し出し

私が君に微笑のカーウエを手渡す

その指先を

君のメリダは

二十二時間の灼熱バスで断ち割り

私のイスタンブールは

跳ねると揺れる丸太の橋で横切る

ならば言う

言つてもよいな

耳を戴りとるあの風を

肩をつらぬくあの雨を

まぶたに積もるあの砂を

土地の秤で土地の時計で

私たちは呑んだのだと

では 結べ奥歯を

こめかみを縦走する君の静脈が

年とともに繁ってくる私の運命線が
午前八時四十分

鯨の板子を踏む生真面目な顔つきで
街の背筋をよじのぼっていく

あと四年あと五年

筋ばったふくらはぎに爪を立てる君は
ヴェネツィアの苔むす壁を抱くと

極彩色の鳥になり

カラカスの煮立つ市場に挿し込まれると
単色の魚になる

「身体があまのじゃく」

言っていたな

言って眉を開きつつ
側頭部の白髪に知らんぷりをしていたな
いいとも

私は買うさ
ツケにも手形にもせず

それが勇気
念入りに練った蛮勇ならば

鳩を啣えたごみ箱のふたも
シュミーズのほつれたアルゼンチンおばさんも

齒刷牙をはさんだ兵士のヘルメットも

魚市場の石畳を斜に舐める午後四時の太陽も

城壁をカタにとつた借金駅の改札も

ふむ ぶきのとうの一粒

いつの間に君の肉は 成程

飼ひ

性の繊維に縫いあわせていることか

チヨクイエニ!

迷えば春のアイリス街道

たたんだ翼を足指のまむしにし

もう一度息を吐く自転車のチェーン

おやグリーン。赤い絹糸だ

見せるなよ

なまこすへもチヂス。春の真珠

不敵に 新の陣中。黒もひる野中

はじけて 赤の骨木さきさき合

移動せよ

暑い

熱

秋葉譜 2019.10.10

秋葉譜 2019.10.10

秋葉譜

秋葉譜